社会主義リアリズムの現在

― 「文学新聞」紙上論争をめぐって ―

長野　俊一

1　はじめに

いま、ソヴェート社会のあらゆる分野で加速的かつ精力的に推し進められているペレストロイカは、人びとの意識に根本的な変革を迫っている。それは激しい浸食作用によって古い岸辺を洗い流すと同時に、爆発的な運動エネルギーを伴って社会の景観を一変し、新しい文化の地平を切り開きつつある。

半世紀以上もの長きにわたってソヴェートの文化政策を支えてきた社会主義リアリズム理論が、「第二の革命」（ゴルバチョフ）と規定されるこの転換期に当たって、その有効性に公然と疑念を差し挟まれ、揺るぎなさを誇っていたその存在基盤が、誇張ではなく、文字どおり音を立てて崩れ落ちかねない状況に置かれている。世界の社会主義的変革の草創期に形成され、ソヴェート文学・芸術の基本的方法として革命後確立された社会主義リアリズムが、いまや新たな「革命」の中で危殆に瀕しているというのは、何とも皮肉な歴史の巡り合わせである。しかも　―　これもまた暗合だろうか　―　1932年５月に＜社会主義リアリズム＞という用語を初めて世に送り出した「文学新聞」が、最近、社会主義リアリズム（理論）の是非をめぐる公開討論のためにほぼ２年間、その紙面を提供し続けたのである。「文学新聞」といえば＜作家同盟＞（その規約では、のちに見るように、社会主義リアリズムの定義づけがなされている）の機関紙であり、その＜作家同盟＞が終始一貫社会主義リアリズムの擁護、堅持、普及に努めてきたことを考えると、この変化の意味するところは決して小さくはない。

そこで、本稿では、ひとまず社会主義リアリズム理論の発生と発展に伴う諸問題について論及し、その後、次に掲げる「文学新聞」紙上論争の展開に沿って争点を整理しながら、この論争の投げかけるいくつかの問題に検討を加え、社会主

義リアリズムの今後の展望について考えるときのよすがとしたい。

なお1986年秋から1988年秋にかけて「文学新聞」に発表された論文、資料、アンケート調査、座談会記録は以下のとおり。

① イ・ヴォールコフ『社会的責任感』、1986年9月24日、39号。
② ヴェ・バラーノフ『躍動性と不変性』、1986年10月15日、42号。
③ ヴェ・ルキヤーニン『廃れた形式と本質の揺るぎなさ』、1987年4月1日、14号。
④ エヌ・フダイベルガーノフ『白黒の色彩と生活の真実』、1987年7月22日、30号。
⑤ ベ・ゴンチャローフ、『<ただ>という短い言葉. . . 』、1987年7月29日、31号。
⑥ 『社会主義リアリズム　―　その争点』（文学理論家、文学史家に対するアンケート調査）、1988年4月13日、15号。
⑦ 『文学新聞』座談会　―　『われわれは社会主義リアリズムを放棄すべきか？』、1988年5月25日、21号。
⑧ エヌ・ブハーリン『現実世界と人間的感情の世界』および読者の投書、1988年7月20日、29号。
⑨ エヌ・ゴルプコーフ『方法の具体化』、1988年1月24日、34号。
⑩ ヴェ・コーフスキイ『方法の崇拝　―　原因と結果』、1988年9月7日36号。

2　規範としての社会主義リアリズムとその限界

「文学新聞」紙上論争についてみるまえに、理解の助けとして、ひとまずその背景を概観することから始めよう。

そもそも1930年代に、アヴェルバッハに代表される「唯物弁証的創作方法」に取って代わり、<ラップ>や<ヴォアプ>などの既存のすべての文学・芸術団体を解散し、唯一の公認組織<ソヴェート作家同盟>を成立させる契機となった「文学・芸術団体の改組についての決議」[1]（1932年4月23日）の背景には、政

治機構にすべての芸術家を直結させ従属させようとする政治的意図が働いていたことは明らかである。全ソ共産党（ボリシェヴィキ）中央委員会のこの決議は、ソヴェートの作家・芸術家の「閉鎖的なサークル活動」を封じ込め、芸術活動全般を政治的課題の解決や社会主義建設のための道具として利用するというその後の悪名高き文化政策への道筋を、結果的に、つけることになった。言うまでもなく、歴史的・社会的文脈を全く度外視して、いわゆる「政治の優位説」を非文学的態度と見なし、民主主義文学運動を文学史から締め出してしまうことは厳に慎まなければならないが、一方、文学の自律性と文学過程の特殊性を無視した「文学の政治化」にはそれ以上の警戒心を持って臨まなければならないだろう。

1934年8月には、「改組についての決議」を受けて、第一回全ソ作家大会が開催され、社会主義リアリズムの精神が高らかに宣言される。ジダーノフはスターリンの偉業に最大級の賛辞を呈しながら、世界で「もっとも思想的、もっとも先進的、もっとも革命的なソヴェート文学」について演説した。スターリンがゴーリキイらを前にして用いたといわれる「人間の魂の技師」という用語の意味するところは何か？、と冗語法を駆使した挑発的な、そしてパセティックな調子で演壇から居並ぶ聴衆（外国の作家を含む数百人の文学者たち）に問いかけながら、彼はこう語っている。

これは、第一に、生活を知ることを意味する。それは生活を芸術作品において真実に描き出すためである。スコラ的に、死んだように、単に「客観的現実」として描き出すのではなく、現実を革命的発展において描き出すためである。

その際、芸術的描出の真実性と歴史的具体性は、勤労者を社会主義の精神において思想的に改造し教育する課題と結び付かなければならない。芸術文学および文学批評のこういう方法は、われわれが社会主義リアリズムの方法と名付けるところのものである。＜中略＞

人間の魂の技師になるということ　―　これは二つの足で現実生活の地盤のうえに立っていることを意味する。このことは次に、古い型のロマン主義との絶縁を、すなわち、存在しない生活および存在しない主人公たちを描き、読者を生活の矛盾と圧迫から実現しえないものの世界へ、ユートピアの世界

へ導き去るロマン主義との絶縁を意味する。堅固な唯物論的基盤の上に両足で立っているわが文学にとってロマン主義は無縁ではありえないが、それは新しい型のロマン主義、革命的ロマン主義である。われわれはこう言う、社会主義リアリズムはソヴェート芸術文学および文学批評の基本的方法である。そして、そのことは革命的ロマン主義が一構成部分として文学創造の中へ入らなければならないことを予想する。[2)]

この演説の内容はそっくりそのまま「ソヴェート作家同盟規約第一項」に盛り込まれ、社会主義リアリズムの定義として定着した。ジダーノフの発言に見られる特徴的語彙を無秩序に列挙して見よう　―　社会主義の建設と勝利、プロレタリア革命、資本主義およびブルジョア文化の残滓の克服、パトス、ヒロイズム、オプチミズム、傾向性、階級闘争、イデオロギー（思想）的内容、作家の意識の立ち後れなどなど。ここでは、社会主義リアリズムについてわれわれが知りうることのほとんどすべてが言い尽されている。なるほど、ジダーノフは「ソヴェート文学はこの領域［文学の技術的側面のこと－筆者］においてすべての先行諸時代によって作り出されたよいものをすべて選び取って、これらの武器の種類（文学創造のジャンル、スタイル、形式および手法）を多様であり豊富であるままに適用する可能性を持っている」[3)]と語り、作家同盟規約にも、「社会主義リアリズムは芸術の創造に対して、創造上のイニシアティヴを表明する特別の展望を、また、さまざまの形式、スタイル、ジャンルの選択を保証する」[4)]と謳われているが、少なくとも文学理論的観点からすれば、その美学的内容は空疎であり、何も語っていないに等しい。そこでは、文学の技術的問題ですら政治とイデオロギーに侵食されている。

文学の発展のための、そしてその芸術的な技術ならびに、その中へのイデオロギーと政治の浸透のための決定的な条件は、文学運動が、党の政策およびソヴェート体制の時局的な課題と密接かつ直接に結合することであり、作家が積極的な社会主義建設へ参加し、具体的な現実を入念に掘り下げて研究することである。[5)]

ある歴史的時代にあっては、政治性が文学性を凌駕することもあろう、またそれが必然であることもあろう。そして、ほかならぬソヴェート政権の30年代以降をそのような歴史的時代と規定する可能性もないわけではない。だが、上のテーゼがソヴェート文学における社会主義リアリズム理論の基礎に据え付けられてしまったことは取り返しのつかない不幸であった。もっとも、これが文学的マニフェストではなく、政治綱領であるとするなら問題は別ではあるが．．．。

さすがにジダーノフは、憑依の去らぬかのような狂信的演説のさなかにあっても、社会主義リアリズムを唯一絶対の方法と断定することを回避しうるだけの戦略的用心深さを備えていた。しかし、それにもかかわらず、社会主義リアリズムは「現存の方法の中で最高のもの」[6]として承認されたし、作家同盟は「党の建てた偉大な殿堂」[7]としてその独占的地位を確立し、文学作品の「品質管理」体制を強化してゆく。内容において社会主義的、形式においてリアリズムという社会主義リアリズムは、そもそも対立概念を持たないので、その規範から逸脱するあらゆる文学潮流、あらゆる文学作品、あらゆる作家・詩人を追放あるいは抹殺しようとした。

> もしゾーシチェンコにソヴェートの秩序が気に入らないならば、どうしろというのか　―　ゾーシチェンコに適合しろというのか。われわれが趣味の点で自己を作りかえるべきではない。われわれがゾーシチェンコに合わせてわれわれの生き方と制度を作りかえるべきではない。彼が自己を作りかえるがよいのだ。そして、もし自己を作りかえることを望まないならば、ソヴェート文学から出てゆくがよいのだ。ソヴェート文学の中には、腐った、空虚な、無思想的な、そして低俗な作品のための場所はないのだ。[8]

ジダーノフ主義（ждановщина）の猛威はとどまることを知らず、アクメイストやシンボリストたちに考えうるかぎりの罵詈雑言を浴びせかけ、しかも彼らの文学を政治的に断罪した。なかんずく、A.アフマートヴァに対する攻撃は陰惨をきわめた。

> アフマートヴァの創造は遠い過去の仕事だ。それは現代ソヴェートの現実

に無縁であり、われわれの雑誌のページの上でしのび難いのである。われわれの文学は文学市場のさまざまの趣味に合わせることを当てにした個人的企業ではない。<中略>アフマートヴァの作品は我が国の青年たちにどんな教訓的なものを与えるか？　害毒のほかには何も与えない。これらの作品はただ、憂鬱、気落ち、ペシミズム、社会生活の緊要な諸問題から逃れ、社会生活と活動の広い道から個人的経験の狭苦しい世界へ離れ去ろうとする希求の種子を蒔きうるだけである。<中略>ところが、アフマートヴァのものが大乗り気で、あるいは<ズヴェズダ>に、あるいは<レニングラード>に載せられ、そのうえ単行版作品集として出版されたのである。これはひどい政治的誤謬である。[9]［下線部筆者］

これは、敵対的なものは、たとえそれが人びとから愛されていようと、すべて葬り去らなければならない、と言ったゴーリキイの1933年の主張の悪しき実践例である。ゴーリキイがソヴェート作家の役割として挙げた「墓掘り人」[10] というメタファーの残酷な現実化である。ところで、上の引用に見られる徹底的な個人主義批判は、ゴーリキイもまた共有していたものであった。彼は、つねに階級的利害の制約を受ける文学者は「内面的に自由な人間」、「人間一般」であったことはかってなかったし、またありえないのだと言っている。文学における個人主義を圧殺するところからは、決して文学における多元主義（pluralism)は生れてこない。しかし、「具体的な芸術的屈折の多様性にもかかわらず、社会主義リアリズムは明確な思想的・美学的境界を備えた全一的体系としてとどまる。社会主義芸術理論においては、いかなるものであれイデオロギー的多元主義の試みの余地はないし、またありえない」[11] という現代の文芸学者の発言からも知れるように、社会主義リアリズムは多元主義の存在を否定しつづけてきたのである。

文学活動における多元主義の否定は、レーニンのもっとも恐れた「機械的平等化」と「均一化」に陥る危険性を孕むと同時に、党の下命する方針に従わない規格外の「不合格品」を消費者（読者）の手に届くまえに処分することにもなりかねなかった。否、「なりかねなかった」どころか、第二次大戦後まもなく、ジ

ダーノフは次のように公言して憚らなかったのである。

同志スターリンは、わが国の作家たちを人間の魂の技師と名付けた。この定義は深い意義を持っている。それは、人間の教育に対し、ソヴェートの青年たちの教育に対し、文学活動における不合格品を許容しないことに対して、作家たちが負っている巨大な責任のことを言っているのである。

ある人びとにはなぜ中央委員会が文学の問題に関してこのような急激な手段をとったかが、不思議に思われているようである。われわれのところでは、このことに慣れていないのである。人びとは考える、もし生産において不合格品が許され、もしくは日用品の生産計画が遂行されず、もしくは木材供出プランが遂行されないとすれば、そのことのゆえに譴責を行なうのは自然なことである、と。しかるに、今もし人間の魂の教育の点で不合格品が許されていても、もし青年たちの教育の仕事で不合格品が許されていても、この場合、我慢してよい、と言う。ところが、このことは果たして生産計画の不履行や生産課題の破綻よりも重い罪ではないのか？[12)]

今や明らかに文学作品の「品質管理委員会」に成り下がった作家同盟の文化政策担当者は、「芸術に無制限の支配を加えようとする現ソヴェート政権の欺瞞と無知と支離滅裂な政策はいかなる芸術的創造をも不可能にする。技師はタービンエンジンを嫌いやながらでも作ることはできる。しかしそれは嫌いやながら作られたものだから、一流のものにはなりえないだろう。しかしそのタービンエンジンは役に立つことはできる。しかし詩は嫌いやでは作れない」[13)]、と日記に記したトロツキイの文学的良識を持ち合わせてはいなかった。

また、社会主義リアリズム理論の諸原則がレーニンによって、その論文『党組織と党文学』の中で公式化されたというのであれば、「無党派的文筆家をほうむれ！　超人文筆家をほうむれ！　文学活動は全プロレタリア的事業の一部、全労働者階級の自覚した前衛全体によって運転される一つの単一な、偉大な社会民主主義的な機械装置の「歯車とねじ」にならなければならない」[14)] という部分だけを文脈から切り離して強調するのではなく、「われわれは、もちろん、アジア的検閲と西欧ブルジョアジーによって汚された文学活動のこの改造が、直ちに行

なわれうるとは言うまい。何らかの画一的な制度を唱導したり、いくつかの決定による問題の解決を唱導したりすることはわれわれの思いもよらぬことである。そうだ、図式主義はこの分野では、どこよりも問題にならない」[15] というレーニンの慎重な態度にこそ学ぶべきであった。あるいはまた、「社会主義リアリズムは範囲の広い綱領である。その中には数多くのさまざまな方法が含まれている。われわれがすでに持っているものもあれば、いま獲得しようとしているものもある」[16] というルナチャールスキイの声に耳を傾けるべきであった。

3　「文学新聞」紙上論争をめぐって

社会主義リアリズム理論に関する論争そのものはなにも今回新たに始まったわけではない。例えば『文学の諸問題』誌では60年代以降何度か誌上論争が行なわれているし、東欧諸国を初めとする諸外国の文学理論家、文学史家、作家による国際的なシンポジウムも過去に開かれている。[17] そこでは、社会主義リアリズム文学の党派性・人民性について、内容と形式の統一について、さらには、伝統と革新、肯定的原理と批判的原理、リアリズムとロマンティシズム、文学者の社会的責任等々について議論が戦わされた。そして、これらの諸問題は最近の「文学新聞」誌上論争においても引き続き争点となるであろう。考えてみれば、それは古くて新しい問題であった。20年代における、プロレタリア文学をめぐるトロツキイやヴォローンスキイのプロレタリア文化否定派とレレーヴィッチ（<ナ・ポストゥー>派の代表者）らのプロレタリア文化肯定派との論争、またフォルマリストと社会学派との論争にも同様の問題がかかわっていた。20年代の文学状況についてはここでは立ち入らないが、ただ、この時期の文学的「混沌」を一気呵成に解消して成立した社会主義リアリズムが置き去りにしたものの「復権」が次から次に行なわれている現在の文学状況がそれに似てきつつあるということを指摘しておきたい。

こうした状況に支えられて、社会主義リアリズム論争がいま活発化している。既述の「文学・芸術団体の改組（ペレストロイカ）についての決議」によって生れた社会主義リアリズムが、いまやペレストロイカの過程で、過去に例を見ないラディカルな批判にさらされているのだ。

紙上論争の口火を切ったのはヴォールコフであった。『社会的責任感』という題名から推察されるように、物質面でも精神面でも質的な変革の現実的な方策が求められている現代ソヴェート社会に見合った肯定的主人公を描き出す作家の役割を強調した論文である。その意味では、何ら新機軸をうちだしているわけではなく、むしろ社会主義リアリズムの正当性を再確認しようとする意図がその主調音になっている。「肯定的主人公」つまり「肯定的な、美しい人間、ソヴェート人のもっとも優れた資質の具象化であるわれらの同時代人である主人公」を描き出したとして、アブラーモフ、ブィコフ、ボーンダレフ、ドゥムバーゼ、アイトマートフらが高い評価を得ている。また、現代社会の否定的側面を真面目に分析している作品、例えば、『魚の王様』、『悲しげな刑事』（アスターフィエフ）、『火事』（ラスプーチン）、『断頭台』（アイトマートフ）を取り上げて、「痛点」に触れることを恐れない作家たちへの賛辞を惜しまない。「社会主義リアリズム文学は、党と人民を助けて、ソヴェート社会の社会的－経済的発展の加速化を妨げるすべてのものを一掃し、ソヴェート社会の基盤、原則、目的を揺るぎなきものにするために情熱を傾けるべき使命を担っている」というヴォールコフは、批判的リアリズムの伝統は擁護するが、暴露文学の一面性を批判している。「否定が芸術的意義を獲得するのは、それが生活の肯定的価値を確認するためになされるときである」からである。そのこと自体に異議を唱えるつもりはないが、これはいままで幾度となく聞かされてきたことだ。

第27回党大会で採択された『共産党綱領』（新稿）［これについては後述する］の中の「文化建設、文学と芸術の分野で」[18] の記述をよりどころとしながら、社会主義リアリズムを「陰欝な自然主義的世態風俗描写」と対置する著者は、返す刀で、ムイシュキン、ピエール・ベズーホフ、アリョーシャ・カラマーゾフら19世紀の肯定的主人公の価値を限定している。彼らにおける肯定的要素がもっぱら個人的完成、個人の自由意志による活動の成果として解釈されており、社会的に決定されていない、というのがその理由である。加えて彼は、20年代の最良の作品でさえ、革命後の社会発展過程の真の歴史的意義を芸術的に理解できなかったと断じている。かくして、社会主義の精神に則った生活の根本的変革にふさわしい形の文学が歴史的必然によって誕生したと説明される。こうした議論の背後には、社会主義リアリズムの絶対的優位に対する変わらぬ確信、その「目

的指向性」への忠誠心が見え隠れしている。

つづいて、バラーノフは芸術的認識が唯一無二の特殊性を有していることに注意を払い、理論と実践の問題に関しても、両者は「覇権争い」をしてはならず、つねに互いに「開かれた」状態にあらねばならない、となるほどと思わせる卓見を述べている。その一方で、文学作品の「構造」、「レヴェル」、「作者の声」に深入りし、文学の特殊性のみにこだわりすぎて、文学とその他のイデオロギーの諸形態とを切り離すことがあってはならないと主張している。これもまた文学研究にとってのアルファとオメガであり、私には反対する理由がどこにも見当たらない。しかし、ここでもまた社会主義リアリズム文学のもつ「目的指向性」および社会主義リアリズム作家のもつべき「目的意識」に主たるアクセントが置かれていて、文学の仕事における健全な道徳的基盤の重要性が説かれる。そして、社会主義リアリズム文学の人道主義と集団主義に、またしてもブルジョア文学の退廃主義、出世主義、個人主義が対置されるのである。

ところで、ヴォールコフとバラーノフ、この二人の文学博士の名誉のために断わっておかなければならないが、両者の論文はスターリン＝ジダーノフ路線に特徴的な教条主義とは無縁である。例えば、レーニンの有名な論文［先に掲げた『党組織と党文学』を指す］の引用に際して、その本質を見失いがちな引用者が「教条主義の催眠術のようなもの」に捕われる危険性を、自戒の念を込めて表明しているのが好個の例だ。

なぜ今日社会主義リアリズムが批評家たちの関心を惹かないのか？　その有効性をどこに求めるべきか？　前者の問に対してルキヤーノフはこう答える　―社会主義リアリズム理論は過去の時代の文学的総括には有効だが、現代の多様な文学的実践をその理論の枠内で把握するのが困難になったためである。確かにそうした答えの可能性も否定は出来ないが、むしろ、「過ぎし日の単純化と思惑の影」が批評家・研究者を尻込させているのではないか。後者の問に対しては　―ヴォールコフのように「社会的責任感」を吹聴することによっても、あるいは、バラーノフのように「主題の変奏に向かう」（ペシミスティックなものでもなく、明るく飾り立てたものでもなく）ことによっても社会主義リアリズムは批評家の救いとはならない、と述べる。現状打開の道はただ一つ、それは創造的個性、主題と視点の独自性、作者の声の唯一性を最大限に認めることである。とこ

ろが、社会主義リアリズムは、歴史的に条件付けられたもの、一般的なもの、集団によって獲得されたものに方向付けられている。社会主義リアリズムは個人的なものも許容してきたが、それはあくまでも「集団的なもの」を侵害しないという制約を伴っていた。人びとは「集団的なもの」に「信仰のシンボル」を見ることに慣らされてきた。このような社会主義リアリズムの概念は必然的に「規範」と化する。そしてその規範がいま疑われているのだ。ゴルブコーフが言うように、「大学の講義室で社会主義リアリズムについて語り出せば・・・あなたがた教師に対する関心はみるみる内に消えてなくなりかねないのだ」。ルキヤーノフは、社会主義リアリズムはすでに最初期の意味を失ってしまった、いまその有効性を云々するのは「儀式的ポーズ」にすぎない、「正直に言えば、現在積極的に活動しているすべてのソヴェート作家を是が非でも社会主義リアリズムの範疇に組み入れてしまう必要はない、と私は思っている・・・言うまでもないことだが、『公刊されているすべての作品が（才能豊かなものでさえ）リアリズムに分類されうるとは限らない』と主張するペ・ニコラーエフは正しい」と言う。要するに、彼の論旨は単純明解だ。現政権の政治的スローガンである「政治的多元主義」を「文学的多元主義」に読み替えろ、と公言しているのである。

ルキヤーノフの論文に「文学新聞」文芸学部が「あとがき」を載せている。「・・・一つだけ争う余地のないことがある。社会主義リアリズム理論は、それが現在置かれている状態や基本的命題と方法論上の原則の完成度からして、複雑で多義的な現代の文学現象の解明につねに役立つとは到底言えないということである」。作家同盟機関紙の公式の態度表明であるだけに見逃せない重大な一節である。

フダイベルガーノフの論文もまた上の「あとがき」の延長線上に位置している。「私の確信するところによれば、いま、批評家たちがよくやるように、階級意識を特別に強調したり、一切を階級意識に還元したり、いかなる行為であろうとその中に絶えず階級的立場を探り出そうとすること　―　それはアナクロニズムである、思考の自由を妨げる卑俗な態度である」というアイトマートフの言葉を引いたあとで、次のように、社会主義リアリズムの公式の現代的読み直しの必要性を説いている。

もちろん、ソヴェート作家は「社会主義の精神に基づいて」仕事をしており、その本はしかるべく読者を教育している。だが、この精神は一体何に、いかにして、どこに、いつ現われるのだろうか？　この精神には具体的な特徴や印でも付いているのだろうか？　この問に一義的に答えるのは難しい。ただこう言えるだけだ。「社会主義の精神」はそれぞれの芸術家の作品に反映されるが、それを一つ一つの言葉、一つ一つの行、一つ一つのイメージの中に捜し求めることは必要でもなければ、実り多いことでも正しいことでもない。

作家はどんな作品においても、客観的現実をその革命的発展において描こうと努めるものだろうか？

ここに挙げた多くの公式は基本的には理に適った正しいものである。しかし、今日では、われわれの生活の全領域に及ぶ革命的建て直し（ペレストロイカ）の精神に基づいた更新と抜本的改革が望まれている・・・　生活と文学における普通でない緊迫した現象への表面的には魅惑的だが、そのじつ教条主義的でデマゴーグ的なアプローチの原理はことごとく覆されなければならない。さもなければ、社会主義リアリズムの内容を充実させ発展させることは、理論的にも実践的にも不可能になる。このことをわれわれが一刻も早く理解してこそ未来の創造的偉業が保証されるのである。

フダイベルガーノフやルキヤーニンが、社会主義リアリズムの公式は廃れて陳腐なものになり果ててしまったと言明したことに対して、ゴンチャローフは異議申し立てをする。彼に言わせれば、社会主義リアリズムの方法の根本的見直しやそれが命脈尽きてしまったことの事実確認が問題なのではなくて、＜ただ＞その発展の新たな段階、新たな局面をこそ問題にすべきなのである。『＜ただ＞という短い言葉．．．』を読むかぎり彼の問題視角が判然とせず、これでは、言葉尻だけをとらえた不毛の論争に陥る危険性があるように思われる。

次に、アンケートの回答と紙上座談会の中から目に付いた意見を紹介しておこう。ちなみに、アンケートの質問事項は次の三項目である。

1 あなたは社会主義リアリズム理論の現状に満足ですか？

2 あなたは社会主義リアリズム理論のどのような問題が、いま、もっとも緊急だと考えますか？

3 現在公刊されつつあるこれまで埋もれていた諸作家の作品は、現段階での社会主義リアリズム理論に合致しているでしょうか？

回答を読んでまず目に付くのは、質問1に対する答えがすべて「ノー」であることだ（八名の回答者は全員ソ連各地の大学の文学教師である）。人選が作為的であるかもしれないが、われわれには知る由もない。また、わずか八名の解答が統計学的に意味を持つとも考えられない。しかし、繰り返すが、＜作家同盟＞の機関紙にこのような結果が発表されたことに深い意味があるのである。回答者は異口同音に、時代精神に見合う現代社会主義リアリズム理論は存在しないと答えている。それは現代の文学過程分析のカテゴリーではなくなった。30年代に、ソヴェート作家の創作実践の統一と中央集権化のための現実的スローガンとして誕生した社会主義リアリズムには、分析的・説明的機能が欠けていた。かくして、規範からの逸脱は直ちに「犯罪行為」と決め付けられ、社会主義リアリズム文学すなわちソヴェート文学の埒外に取り残される作品が大量に生み出される。プラトーノフは、「私がいなければわが国民は不完全である」[19] といわざるをえなかった。ソヴェート文学は、言葉の比喩的な意味ではなく、まさに半身をもぎ取られたぶざまな姿態を自国民の前に晒け出したのだ。質問2については、社会主義リアリズム理論は文学それ自体の運動と緊密な相関関係を結びながら発展すべきである、従って、社会主義リアリズムについて語るよりは複数の創作方法 ―リアリズム、ロマンティシズム、センチメンタリズム、モダニズムなどについて語るほうがはるかに正しい、という意見が現実的だろう。

九名の参加者による座談会では、社会主義リアリズムの批判材料はほぼ出尽くした観がある。МГУ 教授のイ・ヴォールコフを除けば、多少ニュアンスの違いはあるものの参加者全員が美学的用語としての社会主義リアリズムの存在を否定している。例えば、作家のヴェ・グーセフは、社会主義リアリズムは政治的・イデオロギー的用語であるから、きわめて芸術性の高いプラトーノフの『土台穴』（『ノーヴィ・ミール』、1987年6月）を評価できないとほのめかしている。同じく作家のエル・キレーエフは、本来文学的手法の一つにしかすぎない社会主義

リアリズムが唯一、かつすべての方法になったがために、OTK(技術管理部)の品質保証印がなければ文学が文学と認められない状況を揶揄し、文学的「独占」の弊害を指摘している。当初、<ラップ>との論争において批判的武器としての役割を果たしていた社会主義リアリズムではあるが、この用語が基礎科学である文芸学に導入されるやいなや、つまり弾力的な戦術上の論拠から戦略的基礎へと変化するやいなや芸術を規制する手段になってしまった、とキレーエフは語っている。ユ・ボーレフもまた、明確な定義付けを施されないままに定着してしまった用語が「素人」による文学管理の道具として使われ、有能な作家たち ― ブルガーコフ、プラトーノフ、アフマートヴァ、ツヴェターエヴァ、フレーブニコフ、マンデリシュターム ― が文学史から抹殺されてしまったことを慨嘆している。さらには、『人生と運命』(グロスマン)、『新しい使命』(ベーク)、『記憶の権利によって』(トヴァルドーフスキイ)などの作品が、「官僚によって」設定された社会主義リアリズムの適用範囲からはずれたという理由で、発禁処分を受けた。参加者の中ではどちらかといえば保守的な立場に立たされているヴォールコフでさえ、すべての作品を社会主義リアリズム文学に分類し、すべての作家に向かって社会主義リアリズム作家であれと要求する必要はないことを認めている。

他の参加者たちの意見と本質的な差はないが、つい先年、ルイバコーフの問題作『アルバートの子供達』(1987年4-6 号)を掲載して世界的な話題を集めた『諸民族の友好』誌の副編集長エリ・テラコピャンの発言にも耳を傾けておこう。彼は社会主義リアリズムが不変の概念であるという考え方とは分かれるべきだと述べ、昔と今の党派性の意味内容の差異を強調している。30年代には、党派性は時局の要請に応じるという迎合精神と分かち難く結び付いていたが、現代の党派性は創作者の自主性、判断の独立を意味する。彼はまた、世界の芸術の諸潮流、とりわけアヴァンギャルド芸術やモダニズム芸術から切り離されていたことに、社会主義リアリズムの不幸の因があったと指摘している。しかも、アヴァンギャルディズムとモダニズムの外延をむやみに広げてしまったために、ソヴェート文学の遺産は一層みすぼらしくなったのである。

紙幅の関係で論及できなかった論文もあるが、2章の終りに当たって⑧所収のエヌ・ブハーリンに関する資料について一言触れておきたい。これは1934年の第

一回全ソ作家大会におけるブハーリンの報告の抜粋である。昨年、正式に発表された彼の復権の直後に掲載されたものである。その全貌が明らかになるまで論評は差し控えたいが、明らかにされた部分からだけでも、例えばジダーノフやゴーリキイの同大会での演説との際立った違いを見せている。とくに、社会主義リアリズムの叙情性に関するところは面白く読んだ。いずれにせよ、具体的な検討は別の機会に譲りたい。

4　おわりに

もしも、の話しである。恐らく、ゴルバチョフが政権の座に就いていなかったら、そしてペレストロイカとグラースノスチの政策を推し進めていなかったら、このたびの社会主義リアリズム論争は起こりえなかったであろう。幸いにも、政治が文学にそのための場を提供してくれたのである。それが社会主義リアリズムの皮肉な歴史的運命なのだろう。

ゴルバチョフは『第27回党大会への中央委員会政治報告』の中で＜社会主義リアリズム＞を一度も口にしなかった。同大会で採択された『共産党綱領』（新稿）[20] では、さすがに一か所だけその文字が認められるが、その扱い方からは、過去の教条主義的胡散臭さは消えている。

本稿執筆中に二つの出来事に際会した。一つは、アンドレイ・シニャーフスキイの一時帰国、もう一つは、しばらく前から予想されていた『作家同盟規約』改正（草案）の発表である。[21] 痛烈な社会主義リアリズム批判の書『社会主義リアリズムとは何か』（1959年）の著者に一時的にせよ帰国許可が降りたというニュースは、この小論を書きすすめている私にとっては、あまりにも暗示的であった。『規約』から＜社会主義リアリズム＞が消えてなくなることは十分予測された。「文学新聞」紙上論争はそれほど［シニャーフスキイがたじろぐほど―　これも譬え話］熾烈をきわめていた。そして、予測は的中した。正確には、半分的中した。草案から＜社会主義リアリズム＞が跡形もなく消えていたのだ。

ソヴェートでは、この僥倖を巧みに利用して社会主義リアリズムに変わる新しい何かが生れるかもしれない。少なくともその可能性はある。シニャーフスキイ

は、こうなることを予言していたのだろうか、『社会主義リアリズムとは何か』の末尾にこう書いた。

われわれは信仰を失っているが、眼前に生起しつつある神の変容 ― その腸と脳の摺の顫動を眺めて狂喜する能力は失っていない。われわれはどこへ行くべきか知らない。われわれはすべきことはなにひとつないと了解しているが、それでも、考え、推測し、仮定を立て始めている。おそらくわれわれは何かすばらしいことを考え出すだろう。だがそれはもはや社会主義リアリズムではあるまい。[22)]

― 注 ―

1) J.E.ボウルト編著『ロシア・アヴァンギャルド芸術』、岩波書店、1988年、331 - 332 頁。
2) ア・ジダーノフ『党と文化問題』、大月書店、1954年、14-15 頁。
3) 同上、15頁。
4) J.E.ボウルト、前掲書、340 頁。
5) 同上、339 頁。
6) 同上、338 頁。
7) 同上。
8) ア・ジダーノフ、前掲書、24頁。
9) 同上、30-31 頁。
10) エム・ゴーリキイ『文学入門』、青木書店、1962年、136 頁。
11) 『文学の諸問題』誌、モスクワ、1973年、第4号、44頁。
12) ア・ジダーノフ、前掲書、41-42 頁。
13) トロツキー『革命の想像力、トロツキー芸術論』、柘植書房、140 頁。
14) ヴェ・レーニン作品集、第4版、第10巻、モスクワ、1947年、27頁。
15) 同上、28頁。
16) ア・ルナチャルスキイ『文学論』、第2巻、1988年、モスクワ、389 頁。
17) 以下の『文学の諸問題』誌所収論文を参照されたい。

デ・マールコフ『社会主義リアリズムにおける芸術的普遍化の諸形式について』、1972年、1 号

テ・モトゥリョーヴァ『新しいものを見つめて』、1972年、5 号

ヴェ・ノイベルト『社会主義リアリズムの現代的局面』、1972年、9 号

共同討議『社会主義リアリズムの諸問題を考える』、1973年、4 号

ベ・スチコーフ『社会主義リアリズム理論の現代的局面』、1974年、5 号

『現代文学批評の諸問題』に関する特集号、1979年、12号

ヴェ・コレフスキイ『社会主義リアリズムと文学的伝統』、1984年、6 号

エス・シェルライモーヴァ『リアリズムの何が大切か』、1985年、4 号

デ・マールコフ『社会主義リアリズム理論の若干の問題について』、1988年 3号

ソ連＝チェコ文芸学シンポジウム「芸術的方法と作家の創作的個性」（世界文学研究所主催）、1961年、12月。なお、このシンポジウムについては『文学の諸問題』誌、1962年、5 号参照。

18) 『ソ連共産党綱領』（新稿）、「今日のソ連邦」、1986年、第 8 号付録、29-30 頁。

19) 「文学新聞」、1986年 7 月 2 日号参照。

20) 注18) を参照。

21) 「文学新聞」、1989年 3 月22日号参照。

22) ア・シニャフスキイ『社会主義リアリズムとは何か』、現代思潮社、1970年 177頁。